

# 生徒とのふれあい⑩ 思い返すこと あれこれ

谷内純一



横浜の商社に就職を志望した男子生徒H君が、「会社から『自衛隊』についての作文を提出することを課せられたので、書きましたが、これでいいでしょうか」と作文を持ってきました。成績優秀な生徒でした。

法的な面と社会情勢の面から考察し、自衛隊には反対であるという主張が理路整然とまとめられた文章でした。

文章自体は立派なできばえでしたが、私にはちよっと気にかかることがありました。

高教組執行委員だった頃のことですが、M先輩から彼が思想差別で懲戒免職になったというのを聞いたのでした。彼は「自分は解雇になった時点ではその思想の持ち主では

なかったけれども、県教委から誤解されて解雇されたのだ」と話しました。恬淡とした態度でした。

高教組の組合員の小さなお子さんが、手術を受けることになったが、血が足りないので輸血をお願いしたいという緊急の要請があって、高教組本部に居合わせた執行委員が献血をするために日赤の献血センターへ行く道中でこの話を聞きました。

もう一つ、高教組本部にいたときのこと、居合わせた先輩が友人のSさんと話をしていた。Tさんは自分の持っている思想のために自分の子は公務員の職を避けて、就職させたと言いました。Sさんが「それは気をまわしすぎじやろう」と言いましたが、Tさんは「現実はそのまんまよ」と応じていました。MさんもTさんもSさんも高教組組合員なら知らない人は居ない大先輩ですが、名を秘しました。

さて、私は会社は思想調査をするためにこの作文を課したのだからかと思案しました。

思案の末、私はH君に「これでいい」と、一字一句手を加えずに作文を返しました。後日彼が無事その商社に就職できたことを知ったときは、ほんとうに安堵しました。

話は私が大学一年生の時にタイムスリップします。後に親友になったYさんと私は哲学の講座を受講しました。長文解答形式テストの結果はY君は不合格、私は合格でした。Yくんは「どんな採点をしてるんだ、扇風機で飛ばして決めているんじゃないのか。」と大変憤慨していました。

Yくんは大変な読書家であり、当時すでに実存主義哲学の本もかなり読んでいました。私は哲学なんてなんのこっちゃらというありさまだったので、Y君は土佐高校で国語では学年で一番の成績を修め賞金を貰った事もあり、後には卒論もはやばやと立派な物を書き上げた実力の持ち主でした。哲学の教授F先生は高知新聞に寄稿するなど名士でした。

今、思い返してみても、私は、F教授は実存主義哲学よりの

Y君の答えを受け入れず不合格にしたのだと推測します。そして教授の採点は間違っていると判定します。F教授より、横浜の商社の人事課職員がフェアであると思えました。この二つの出来事が社会の進歩の結果を示すものならば、それは結構なことですが。

余談になりますが、Mさんだけは献血できませんでしたが、血圧が200超と高すぎたからです。Mさんはこのことで初めて自分の高血圧を知ったのでした。私はMさんにもっと解雇になった時のことなどを聞いておいたらよかったです。と今になって痛切に思います。また今頃、Yくんの憤慨に同調しなかったのを悔いています。



牧野富太郎博士 少年像 (牧野植物園)

## 「ハイセイコー」で妻に叱られたこと

前編

土居 修



「誰のために走るのか 何を求めて走るのか 恣に別れがあるように この日が来るのが恐かった ありがとう友よ さらばハイセイコー」 『さらばハイセイコー』の一番の歌詞である。失礼だが、なんと稚拙な詞であることよと吐き捨てたくもなかった。しかしながら、一頭の馬を擬人化して「ありがとう」と語り、「友よ」と呼びかける哀切な心情が私の3年間の青春に通底している。今もなお、愛執の念断ち難い楽曲であると綴ることにはいささかの逡巡もな

い。レコードが発売されたのは1975年(昭和50年)1月。だが、初めて公開されたのはその前年の12月15日、ハイセイコーの引退試合である有馬

記念であった。彼が入線した直後にBGMとして使われている。テレビの中継番組もレース終了後にこの曲を流し、優勝馬であるタニノチカラの勝利よりもハイセイコーが引退レースでタケホープ(ハイセイコーの出走した東京優駿、菊花賞、天皇賞を勝ち、終生のライバルである)に先着したことを繰り返して伝えたという。

私が初めて聞いたのは、高校卒業を一月後に控えた肌寒い日の午後、谷口食堂の古めかしい室内。悪友たちといつものように鍋焼きラーメンを食べているときであった。冒頭の荘重なファンファーレに魂が震えたことを覚えてい

る。恍惚として聴き入り、いつしか嗚咽。思わず、ありがとう、ありがとうと呟いていた。怪訝な表情を浮かべる彼らを視界から外して口に運んだ細麵の、なんとしよっぱかったことか。生涯忘れることはない。



ハイセイコー号の像 (北野新町)

う、増沢。ちゃんと歌わんかい」と憤ったことも、今となっては殊更になつかしい。長男が馬券を買っているのを知った3年前に遡る。職場の先輩に勧められたらしい。仕事の帰りに高知競馬場に行っているようだが、日曜日の午後には勝負師らしい顔つきで、テレビの前に座って見ている。結婚する意思のない27歳の息子に苛立ちを隠そうとはしない妻。少なからず、私自身にも歯がゆい思い。だが、気ままな独身生活を謳歌している息子に羨望の眼差しを向ける瞬間もないこともない。

初夏のある晩餐。食卓に初鰹のタタキがならんでいた。今宵の酒は格段に美味いぞと思っていたら、妻が不意に問いかけてきた。「競馬ってギャンブルでしょ」「ギャンブルといえば、い

えないこともないね」「厚く切ったニンニクの香味が脳天を貫き、体組織が若返ってゆく感覚。そして、強壯・強精に作用しているという愉快。邪険に返答するしかなかった。「まじめに、答えてよ。まったく」

語勢が強かった。叱られているのだろうか。だが、それどころではない。貧しさを呪いながら生きる日々で、季節の旬を堪能できる至福のひとつ。不承不承に答えた。「答えているよ」「じゃあ、厳しくいってよ」「なにを」「あの子に競馬を止めるように。私は嫌いな、ギャンブルが」

妻の策略の見事に兜を脱ぐしかなかった。一方で、まもなく55歳になろうとしている熟女の清廉さに感無量の涙をこぼしていた。しかし、「あなたがいえば」と口を滑らしてしまっただけで、不用意であった。鰹の清々しさが恨めしかった。後の祭り、であった。

「あなたは、父親でしよう」語勢がさらに強くなっていた。なぜ叱られたのかわからな

い。(以下、後編で完結します)

会費納入のお願い  
年会費二千円

本年度の会費納入をお願いいたします。今回の高退協送付物の中に納振り込み用紙が入っておりますので左記の口座まで振り込んでいただくようお願いいたします。お問い合わせは高教組書記局内高退協事務局(088-822-6822)まで。

ゆうちょ銀行  
口座記号 01650-2  
口座番号 11893  
加入者名 高知県高等学校教職員協会  
退職教職員協議会